群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター

Center News

Center for Cooperative Research and Development on School Education
Faculty of Education, Gunma University

第７号
（2019年３月31日発行）

「学び合う仲間によるリレー講座」における現職教員の真剣なまなざし

目次

2 ● 巻頭言：地域と教育学部を結ぶ役割を担って
3 ● 寄　稿：退任に際して－教育カウンセリング概論（初等･中等）から思うこと－
4 ● 寄　稿：「学び合う仲間による教員研修リレー講座」に寄せて－発達障害の子どもへ向き合い続けるために－
5 ● 寄　稿：教育実践のいっそうの高度化のために
6 ● 報　告：附属幼稚園・附属小学校から
7 ● 報　告：附属中学校・附属特別支援学校から
8 ● 報　告：今日的要請に対応する学部・附属学校園連携による実践的なFD活動の推進
9 ● 報　告：子ども総合サポートセンター事業概要
10 ● 報　告：附属小学校における取組 ～提案授業・授業研究会～
11 ● 報　告：現職教員の成長を促す温かな学び合いの場
12 ● 報　告：教育臨床事例検討会2018年度の取り組み ～学びの発信に向けて～
13 ● 報　告：体験的科目における地域貢献
14 ● 報　告：群馬大学教育実践研究36号発行のお知らせ
15 ● 報　告：センター協議会・資料室利用状況
16 ● 報　告：次年度へ向けた取組の紹介

巻頭言

地域と教育学部を結ぶ役割を担って

附属学校教育臨床総合センター長　**上　原　景　子**

群馬大学教育学部は，今から10年以上前の群馬県教育委員会との連携に関わる協議会での協議から，「地域とともに行う教員養成」という視点を取り入れ，「学校現場往還型カリキュラム」を築き，開始いたしました。このカリキュラムは全国でも非常に特徴あるカリキュラムとして注目を浴びています。それは，１年次の教育現場体験学習，２年次の授業実践基礎学習，３年次の本実習，４年次の教職実践インターンシップを体系的に実施する先進的な教員養成プログラムであるからです。「学校現場往還型」というのは，教師を目指す学生たちが，学校現場における「教師」という視点での体験的な学びと，大学における学修を段階的に繰り返しながら，教師としての素地を築いていくという意味です。この「学校現場往還型カリキュラム」が先進的な教員養成プログラムとして高い評価をいただき続けているのは，群馬県教育委員会，市町村教育委員会ならびに実習に協力してくださる数多くの学校のご理解とご協力の賜物です。

私たち附属学校教育臨床総合センターの主な使命は，教育実践に関する臨床の学の創出と研究，そしてその成果を踏まえた教育，研修，支援を行うことです。そのため，私たちは，大学と学校現場との協働的・実践的な研究を通して，今日の学校教育課題の解決に資する実践的指針を見出すことを目指し，教員養成と地域の教育や学校現場への貢献を行っています。附属学校教育臨床総合センターは，「教育実習・実践開発部門」「国際理解教育部門」「教育臨床心理部門」という３部門と「子ども総合サポートセンター」「教員養成ＦＤセンター」「学部・附属学校共同研究センター」の３センターで成り立っています。これらの全てが学校現場と密接に関わりながら，多くを学ばせていただくことで，教育への貢献と還元ができると考えております。

私は，平成27年度から平成30年度までの４年間，附属学校教育臨床総合センター長としてお世話になって参りましたが，その任期も今年度末で終了いたします。任期中は，非常にたくさんのことを学校現場から学ばせていただきました。また，群馬県教育委員会や市町村教育委員会の皆様からも大変温かいご支援をいただきました。心から感謝申し上げます。学ばせていただいた数々のことを生かして，これからも群馬県の教育に貢献したいと思います。

附属学校教育臨床総合センターは，これからも地域と群馬大学教育学部を結ぶ役割を一層効果的に担えるよう努力して参りますので，引き続きご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

● 寄　稿

退任に際して
ー教育カウンセリング概論（初等・中等）から思うことー

学校教育臨床総合センター客員教授　**井　田　廣　司**

カウンセリングというイメージから

毎年学生に講義の冒頭オリエンテーションで「カウンセリング」のイメージを問うと，決まって良い応えはなく，「問題の子や病んでいる子が行く所」というネガティブなイメージのものか，今までの生活の中で印象に無い遠い存在・関係の無いものが圧倒的に多かった。

そこで，このシリーズでは，カウンセリングに関する理論や技法が一部の悩みや課題を持つ児童生徒ばかりでなく，全ての児童生徒の学校生活を支え，成長に大いに貢献し，教育推進・学級経営を円滑に進めるために生かせるものかを体験を交えた理解の場となるよう願い，取り組んできた。

出会いから広がる関係

学校は，児童生徒との出会いから始まる。そこで大事なのは初対面の出会いの時間を如何に過ごすかで，その後の関わりに繋がる。ここで生かされるのが面接技法。カウンセリング演習での技法が役立つ。傾聴や共感的理解がもたらす信頼関係が生きてくる。

出会いは学級づくり・学級経営の始まりとなる。集団としての関係づくりは，構成的グループ・エンカウンターが大いに役立つ。エクササイズの活動を通した子ども達の人間関係づくり。言葉の少ないものから多いものへ，心理的距離のあるものからより近くへ，身体的関わりの無い又は少ないものから多いものへ，エクササイズを通して楽しみながら関係づくりが可能となる。共に過ごした心地よい体験は，その後の生活・人間関係に反映される。ファシリテーターの教師との関係にも好感として反映される。

ピア・サポートやブリーフセラピーの理論や技法も，体験的活動が学級活動やグループ活動における人間関係や相互の問題解決力の育成などに取り入れることもできる。

理解から成長サポートへ

児童生徒の教育・援助指導を進める上で個々の実態や個々の欲求，求められるものを知ることは重要なこととなる。個々の児童生徒を知る・理解するは心理アセスメントそのものであり，同時に成長への援助指導のスタートとなる。教師としての観察力はキャリアと共に磨かれていく。教師にはその生かす場・機会として学校があり，観察と援助指導が同時に行え，その場で反応を見ながら修正できるという強みがある。日々の接触時間の長さと連続性・継続性は援助指導上大きなメリットであり，有効に使いたい。

問題と言われるものは，援助・指導すべき課題と捉える。児童生徒が自ら課題意識を持つことは少なく，さらに教師への相談に結びつくことは希である。児童生徒の示す態度・行動を課題解決希求の叫び・訴えとして教師から積極的に関わることが望まれる。

セルフヘルプのために

教師自身の心的健康管理は重要で，心的なセルフヘルプの方法として認知行動療法の考えが役に立つ。自らの自動思考や循環的思考を外在化し，チェックし，反証を探したり，より適応的な思考を意識の中に明確にし，行動化して確かめることで実証する。これを繰り返すことでより適応的な考え方が自然に，又は気づき修正できるようになる。

ストレスコーピングリストの作成。ストレスフルな日常をより快適に過ごすために適宜リストの中から選んで実行し，ストレスの低減を図る。“0”にすることではなく，自ら選択し実行すること意味がある。そして，何時でも，何処でも，タダ（無料）で，一人でできるマインドフルネス呼吸法・瞑想法もストレスに強くなる方法の一つとして思い出して欲しい。

終わりに

新年度より大学は新しいシステムがスタートする。講座「教育カウンセリング」は形を変えても児童生徒を中心とする教育を支えるものとして，これからもその役割を担って行くものと考える。

結びに，これまでに多くの学生と出会えたことに感謝します。

● 寄　稿

「学び合う仲間による教員研修リレー講座」に寄せて
－発達障害の子どもへ向き合い続けるために－

群馬大学教育学部　**霜　田　浩　信**

私は，第１回目の「学び合う仲間による教員研修リレー講座」から発達障害に関する講座を担当させていただいてきた。今年度で８回目となる本リレー講座であるが，この間の「現代的学校教育課題」のなかに発達障害や特別支援教育は常に課題として位置づいているかと思われる。しかし，この発達障害や特別支援教育に関する理解を深め，実践力を向上させることは，教員としての専門知識の獲得や実践的指導力の向上だけでなく，まさに「豊かな人間性や社会性，コミュニケーション力，同僚とチームで対応する力，地域や社会の多様な組織等と連携・協働できる力」[1] につながることと考える。

しかしながら，発達障害の子どもへの関わる際に，「なぜできないの？」「本当はできるはずなのに…」等々の思いをまず抱えるかもしれない。その思いはやがて，「こんなに教えているのに…」「また問題を起こして…」「自分の指導が悪いのかも…」という思いに変わってしまうかもしれない。だが，そのような思いのまま子どもに関わっても，子どもが変わることはなく，むしろ，お互いにポジティブな気持ちにはなれず，子どもに向き合いきれなくなってしまう。そのような思いは発達障害の子どもに「どのように支援すれば良いか」が見えない状況から生じると思われる。「どうすれば良いか」を分かるには，「なぜうまくいかないのか」という原因を知ることが必要であり，その原因が分かれば支援の工夫につながるのではないだろうか。

発達障害の子どもへの関わりが「うまくいかない」原因を見いだすためには，発達障害の子どもが示す困難さの原因に着目していくことが重要である。発達障害の子どもが示す困難さを「指示にしたがって行動できない」「集中力が短い」「人とのうまく関われない」などと表面的に捉えてしまうと，どうしてもこちらからの支援も，指示を繰り返し，励ましや注意・叱責にとどまってしまう。結果，発達障害の子どもへの関わりが「うまくいかない」となると，子ども自身を「指導しても改善しない子ども」と捉えたり，逆に「自分自身の指導力不足…」と思い悩むことになってしまったりする。

発達障害の子どもが示す困難さの原因を捉えるには，やはり，日々の学習や生活での様子を丁寧に観察することも大切にしていきたい。「〇〇ができない」と捉えるだけではなく，どこまでならできるのか，どのような学習や活動でならばできるのか，誰とならできるか，どのような支援をすればできるのかを関わりや観察から捉えていくことによって，「困難さの原因」や支援を考えるヒントにつなげたい。あわせて，観察から見えてきた行動に「なぜ」と切り込んでいく視点も同時に必要となる。それは，やはり発達障害という特性そのものを知ることである。発達障害の子どもたちが示す困難さの原因を整理して頭に入れておくことによって，子ども行動の「なぜ？」によりせまりやすくなっていくであろう。困難さの原因に基づく支援によって，発達障害の子どもを「指導がうまくいかず困った子ども」から，「適切な支援をすればのびる子ども」といった捉えに変えることができるであろう。子どもの困難さの原因に基づいた支援の結果，子どもに望ましい行動が見られるようになれば，なお一層，支援の工夫につながり，子どもたちにポジティブな気持ちで向き合っていくことが可能になろう。

また，発達障害の子どもへの支援は関係する者がチームによって支援していくことが原則である。チームによる支援でのポイントは，①チームメンバーの明確化，②対象となる子どもに関する情報の共有化，③対象となる子どもへの支援の共通化である。特に対象の子どもに関する情報の共有化では，学習や生活に関わる実態について，単に「何ができて何ができないか」だけでなく，どのような場面や学習内容，指導支援をすればうまくできるのか（できないのか）というように，状況や支援との関係性のなかで捉えた本人の情報を共有することが重要である。その情報の共有があるからこそチームメンバーで支援の共通化が可能になる。そして，共有化された情報や共通化された支援は個別の指導計画に記載されることによってより一層，情報の共有化と支援の共通化が図られることになる。

1）教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（平成24年６月25日）中央教育審議会

● 寄　稿

教育実践のいっそうの高度化のために

紀要編集委員長　**豊　泉　周　治**

学校教育臨床総合センター紀要「教育実践研究」第36号が発行されました。もうご覧いただけたでしょうか。今年もたくさんの皆様から投稿があり，31本の論文が掲載され，ページ数も300ページを超え，たいへん充実した内容となりました。執筆者の皆様，発行に当たってご尽力いただいた編集委員の皆様，センター教職員の皆様にお礼を申しあげます。

執筆者は本学部・大学院の教員，大学院生，附属学校園ほか県内各学校の現職教員の皆さん等で，のべ88人に及びます。本学教育学部・教育学研究科を拠点としてこの１年間に取り組まれた各校種，各教科にわたる多様な教育実践の数々が報告され，さまざまな観点からそれらの意義や課題が追究されています。多くの論文が共同研究の成果であり，学部・大学院の教員との協働の下で，大学院生や現職教員が主体となって教育現場で取り組んだ意欲的な教育実践研究の成果が多く見られます。各論文からは，優れた教育実践を追求する上で，また挑戦的な新しい教育実践に取り組むために，多くの知見やヒントが発見できるものと思います。まずはCDを開いて，興味のある論文からお読みいただけたらと思います。

いま，本学教育学部・教育学研究科は，宇都宮大学との共同教育学部の設置，教職大学院の拡充（修士課程の廃止）に向けて，大きく変貌しようとしています。教員養成をめぐる厳しい状況に対応する中，改革によって求められるのは「教育実践の高度化」です。従来から本学部・大学院では，おそらく他大学にも増して，教育現場に根ざした「教育実践」に照準を合わせて，高度な教員養成のための教育研究に力を注いできました。その成果はめざましいものがあったと思われますが，そのステップをさらに進めることが，あらためて求められています。そのために，学部・大学院の教員と大学院生，現職教員とが学校現場での教育実践を主な研究対象として積み上げてきた本センター紀要の諸研究は，教育実践のいっそうの高度化に向けた教育研究の起点であり，ステップ・アップのための重要な資源になるものと思われます。

本センター紀要が，本学の教員，学生・院生ばかりでなく，「教育実践の高度化」をめざす多くの現職教員，教育関係者の目にとまり共有財産となることを，さらに新たな教育実践の成果を持ち寄って，本紀要がいっそう充実することを，願ってやみません。

● 報　告

附属幼稚園から

附属幼稚園　西　村　竜　哉

附属幼稚園では，「幼児の遊びを豊かにする園庭」を主題に掲げ，研究を進めています。２年次となる本年度は，副主題を「遊びたい！を引き出す園庭づくり」と設定し，幼児一人一人の遊びを豊かにするために，園庭の自然を中心として環境構成や教師の役割について追究してきました。

本園は，平成29，30年度文部科学省施設整備事業として園舎改築（新営）を行うことになり，それに伴い，園庭も大きくつくりかえることになりました。旧園庭において，昨年度取り上げた“幼児の遊びが豊かになっている”と感じた事例をはじめとする，これまでの園庭の自然を中心とした実践を基に，新園庭の環境構成を一から検討しました。さらに，新しく植える樹木について，その特徴を調べ，幼児がその樹木とかかわるなかでどのように遊びが豊かになるのかについてカンファレンスを行いました。そして，園庭内でどの場所にどの樹木を植えることが幼児の遊びを豊かにするのかを考えていきました。また，樹木だけでなく築山や砂場，遊具との位置関係も考慮しながら，園庭全体の設計に生かしていきました。

指導計画の見直しも行いました。各期が終了する毎に当該学年が修正案を提案し，職員全体で検討しました。幼稚園での保育が，小学校の教育へとさらに繋がっていくよう，指導計画の見直しとともに職員全体で具体的に話し合うことで共有しました。

園舎園庭は，平成30年12月に完成し，平成31年１月からは新しい園舎や園庭で保育をスタートしています。今年度は，園舎改築のため公開研究会を実施することはできませんでしたが，平成31年度の公開研究会（５月）は，新園舎園庭で初めて開催する研究会になります。上述の研究成果として園庭で遊ぶ幼児の姿をご参会の皆様に見ていただければと考えております。

附属小学校から

附属小学校　櫻　澤　直　明

附属小学校では，「未来を拓く子どもの育成」を研究主題に掲げています。３年次となる本年度は，副主題を「子どもが躍動をする授業改善」と設定し，これからの教育で求められる資質・能力の育成に向けた教育研究を進めてきました。問題解決への熱意・探究心及び自分の考えの表出を「躍動」と捉え，各教科等の問題解決的な学習における，子どもが躍動をする姿を明らかにするとともに，子どもの躍動を促す学習指導の工夫を行ってきました。学部の先生方のご協力や，県教育委員会指導主事の方々のご指導をいただきながら，各教科等部による提案授業（計12回）及び部内授業（計15回）を通して，研究の検証と再考を繰り返してきました。研究の成果については，2019年度の公開研究会（６月７日・８日）で発表いたします。「プログラミング教育研修」として，学部の先生方や宇都宮大学の久保田善彦先生にご講義いただき，ご協力やご助言を得ながら，授業実践を行いました。また，本年度も附属四校園や県内教育関係者を対象に「夏季教育講演会」を開催し，主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくりや評価について，京都大学の石井英真先生にご講演いただきました。参会者一同，今後の教育の方向性を見据える充実した機会となりました。

〈図画工作科提案授業〉

〈プログラミング教員研修〉

今後も，本校の研究や教育活動の成果を地域に広めたり，共に学ぶ機会を設けたりするなど，群馬県の教育の向上を目指し，より実践的な研究や取組等を進めていきたいと考えています。

報　告

附属中学校から

附属中学校　加　瀬　　健

本校では，今年度から研究主題を「自ら問題を解決し，未来を創る生徒の育成」，副主題を「『見方・考え方』を働かせる問題解決の過程を通して」とし，１年次の研究を進めてきました。これからの予測困難な時代において，子供たちには様々な変化に積極的に向き合い，どのような状況にも柔軟に対応し，自らの力で社会や自分自身の問題を解決できる力を身に付けさせることが重要であると考えています。昨年度までの研究で身に付いた資質・能力を活かしつつ，自ら問題を解決し，よりよい未来を創るために必要な資質・能力の育成を目指して授業実践に取り組んできました。

その中で，必要な資質・能力を育成する方法として「問題解決の過程」に視点を当て，各教科・領域等における学習過程とその各過程の関係性を構築し，授業改善に取り組みました。また,「見方・考え方」を働かせた問題解決の過程とするための具体的な手だてを講じることで，主体的・対話的で深い学びを実現し，より確かに資質・能力を育もうとしました。

成果として，各教科・領域等において，問題解決における各過程の関係を構築したり，そのための手だてを講じたりしたことは，問題を解決するために必要な資質・能力を教科横断的に養うことにつながりました。また，各教科等の授業では，課題に対し粘り強く取り組み，そこまでの学習過程を振り返りながら，自らの学びや考えを表現することができました。

10月に開催した公開研究会では，文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官の浅見哲也先生・直山木綿子先生にご講演いただき，新しい学習指導要領の実施に向けて，「特別の教科　道徳」の全面実施に向けた授業づくりや「外国語教育における小中連携」についてご指導いただきました。600名に迫る多くの参加者に恵まれ，たくさんのご意見をいただくことができました。

2021年度の新しい学習指導要領の全面実施に向け，今年度の課題や反省を基に２年次以降も計画的･継続的に研究を重ねていきます。今後，県内中学校のモデルとなるべく，さらなる授業改善を推進していきたいと思います。

附属特別支援学校から

附属特別支援学校　松　尾　英　知

本校は，平成28年度より「人とかかわりながら学びを深める児童生徒の育成」を研究主題とし，「交流及び共同学習」「地域との連携･協働」を研究上の中軸に据えた実践に取り組んでいます。

研究においては，一人一人の子どもがそれぞれの学びの場において，他者とかかわり合いながら「学習のねらい」に迫る授業を一層確かにすることを目指しました。そして，昨年度に整理した「『共に学ぶ』『確かな学びを得る』授業づくりの過程」に基づいた実践をとおして，大切にしたい考え方や配慮事項を見出し，整理することに取り組んできました。

11月に開催した公開研究会では，小・中・高の各部が３授業ずつ公開しました。小学部は，校舎を共有する附属小学校との交流及び共同学習において，両校児童がかかわり合いながら共に教科のねらいに迫ることを目指した図画工作科の授業と，校内の友だちと学び合う国語科，算数科の授業を公開しました。中学部は，隣接する公立中学校特別支援学級の友だちと両校の間の道路沿いにある花壇を，協力し合いながら整備する作業学習と，校内の友だちと共に考えながら教科のねらいに迫る国語科，数学科の授業を公開しました。高等部は，地域の方に評価をいただきながら，自身の振る舞いや製品を改善していく２つの作業学習と，友だちと評価をし合いながら教科のねらいに迫る家庭科の授業を公開しました。

実践をとおして，以下の２つの成果を確かめることができました。

「『共に学ぶ』『確かな学びを得る』授業づくりの過程」について，大切にしたい考え方や配慮事項を見出し，整理したことで，交流及び共同学習の授業づくりの際に，両校教師が両校児童にとって大切なことを，１つ１つ確かめ，単元を構想・実施・評価できるようになってきたこと。

地域と連携・協働した学習においては，子ども一人一人の目標と共に，学校と地域にとっての意義を共有することで，授業が実践できるようになってきたこと。

インクルーシブ教育システムの構築が求められる今，この取組をさらに広げ，子ども一人一人が，それぞれの学びの場で，様々な人と活動し，充実感を味わいながら，確かな学びを得ることを今後も目指します。

報　告

今日的要請に対応する学部・附属学校園連携による実践的なFD活動の推進

教員養成ＦＤセンター長　**吉　田　浩　之**

2006年７月の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方懇」の中では，「教職課程が専門職業人たる教員養成を目的とするという認識が大学教員の間に共有されていない，教員の研究領域の専門性に偏した授業が多い，学校現場が抱える課題に必ずしも十分に対応していない」等の問題が指摘されました。また，国立大学法人の第１期中期目標期間終了を踏まえ，2009年６月５日の文部科学大臣が決定した「国立大学法人の組織及び業務全般の見直しについて」では，「附属学校園は学部・研究科等における教育に関する研究に組織的に協力すること」が強く勧告されています。このような背景を受け，本学教育学部では，当時の運営委員会が，教育学部教員の実践的指導力をさらに向上させるべく教育学部教員に適したFDプログラムを組織的に実行できるセンターの開設に努力し，2011年４月から「教員養成FDセンター（以下，「FDセンター」）がスタートしました。

その後も大学教育改革，特に教員養成学部についての提言が次々と出されています。例えば，2013年５月の教育再生実行会議「これからの大学教育等の在り方について（第三次提言)」では，「初等中等教育を担う教員の質の向上のため，教員養成大学・学部については，量的整備から質的充実への転換を図る観点から，各大学の実態を踏まえつつ，学校現場での指導経験のある大学教員の採用増，実践型のカリキュラムへの転換，組織編成の抜本的な見直し・強化を強力に推進する。学生の学校現場でのボランティア活動を推進する等，大学と学校現場との連携を強化する。文部科学省は今後行われる小学校教員免許の改訂や大学院の教職大学院化に伴い，附属学校園との連携による積極的な研修を通した教育実践的な教員を強く求める。」等が提言されました。

さらに，2017年８月の国立教員養成大学・学部，大学院，附属学校の改革に関する有識者会議「教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて」の報告書では，「大学教員についての対応策」の中で早急に対応すべきこととして，「国立教員養成大学・学部において，研究者教員が一定期間，学校現場での教育実践研究の経験を積むことや，学校現場との共同研究を実施すること等について，時期や比率等に関する目標値を設定し達成状況をチェックすること等，教員養成分野の大学教員として必要な資質・能力を向上できる仕組みを整備することにより，実際の学校現場における教育活動と教育学を融合できる大学教員を確実に増やすこと。」が示されています。

また，群馬大学中期計画（第三期）の「教育学部のアクションプラン」でも，FDセンターに関する計画として「FDセンターを活用して，研究者教員が学校現場での指導を経験するためのFDについて検討する。(2016年度)ことが明記され，本年度（2018年度）は「FDセンターを活用して，研究者教員が学校現場での指導を経験するためのFDについて実施する。」とされています。

このような提言等からは，教員養成分野の大学教員として学校現場における教育活動と教育学を融合できる資質・能力及び実践力の向上に資する大学と附属学校園の連携による積極的な研修の実施が求められていることがうかがえます。一方で，上記で求められているような研修に該当する機会は，学部・附属学校園が連携する活動の中に，すでに少なからずみられます。たとえば，附属学校園の公開研究会や教育実習，学部教員による附属学校の児童生徒への授業や教員への校内研修等です。そこで，それらにFDの視点で大学教員が参加し，自らの教育内容・方法や教育実践に資する学びや気づき等を記録・報告する仕組みをつくることで，実践的なFDの機会になるよう，事業計画を構想し，2017年度から実施しています。

本年度は，そのようなFD活動を推進し，結果としてFD参加の報告書数は，64件となりました。今後は，本年度の取組の一層の推進と充実を図り，学部教員が附属学校園を日常的に訪問することや附属学校園で授業することが当たり前の光景になることに，より貢献していきたいと考えています。

● 報　告

子ども総合サポートセンター 事業概要

子ども総合サポートセンター長　懸　川　武　史

1　研究「学びのユニバーサルデザイン（UDL）に基づく授業研究の在り方」

ＣＡＳＴによるＵＤＬの理念（子ども一人一人の学びを保障する）に基づき、授業実践を通し研究を推進する。ＵＤＬガイドライン(CAST 2018）をもとに、教科と特性を踏まえた「ガイドラインモデル」を作成した。モデルを観点といして授業デザインを行い、第１学年算数科、交流及び共同学習の図画工作科の授業を３月１日に公開した。

※　公開研究会では，県内外より45名が参加した。
※　県研究所連盟春季研修会で成果を発表した。

2　「電話相談」,「来所相談」　※平成30年度支援ケース数　電話６名　来所２名

県内の障害のある幼児とその保護者，学級で不適応を起こしている幼児児童生徒とその保護者を対象とした，電話相談や来所相談を行う。

※　１件については，学校訪問，教育相談を行っている。

3　「訪問相談」　※平成30年度支援ケース数：86名　学校園訪問17校園

県内の様々な課題を抱える幼児児童生徒とその学校園の依頼に応じて，学校経営アドバイザー（附属小学校スタッフ）と特別支援教育コーディネーター（附属特別支援学校スタッフ）の２名，を原則とし，必要に応じて大学のスタッフを加えて学校園を訪問する。

※　必要に応じて諸検査を実施，保護者，担任との面談を行った。

4　「研修支援」

県内の教育関係者を対象とした，公開研究会の開催や，研修講師の派遣，検査器具の貸し出し等のそれぞれのニーズに応じた研修の機会を提供する。

※　平成30年度事例検討型ワークショップ２回（公開）に教育関係者等のべ13人が参加
※　渋川市内中学校にてＵＤＬについての授業参観，校内研修に講師として２名を派遣した。(３回)
※　太田南小学校，玉村南中学校にて児童の見取りと支援について校内研修の講師を行った。

5　個別・グループ・集団指導（年間10回開催）

県内の小・中学校に在籍する特別な配慮を必要とする児童生徒とその保護者を対象に，指導，支援を行う。また，そこで見られた児童生徒の様子を基に，センター・在籍校・保護者の三者が在籍校や家庭でのよりよい支援について検討していく。

※　保護者・在籍校担任等研修会（１回　開催）

6　諸検査の実施　※平成30年度支援ケース数：３名

県内の様々な課題を抱える幼児児童生徒の保護者からの要望に対して，諸検査等によるアセスメントと，エビデンスを基にした対応を検討していく。

7　「心のバリアフリー推進事業」

図画工作，美術を中心に，附属４校園で交流及び共同学習の授業実践を行い，教科を通した障害者理解教育について研究を進める。

※　幼稚園１回，小学校３回，中学校１回の特別支援学校との交流及び共同学習を行った。
※　図画工作の題材と関連させて，算数の授業を行った。(２回)
※　特殊教育学会で実践発表を行った。

● 報　告

附属小学校における取組 ～提案授業・授業研究会～

学部・附属学校共同研究センター長　**吉　田　秀　文**

今年度も附属小学校では，各教科等部の研究方向に沿った提案授業を公開し，研究の課題や妥当性・有効性について検証した。提案授業では学部教員が研究協力者として関わり，実践後は参観者と共に研究の具体化や深化に向けて様々な議論を行った。これは附属小学校教員一人一人の授業力向上に資するものとなった（表）。

また，今年度は数理データ科学教育研究センター等のご指導の下，プログラミング的思考に関する研究会も開催され，各教科等部における授業実践の可能性が検討された（写真）。

〈提案授業　参加者一覧〉

〈教科〉　日　時　　学　年　　テーマ	授　業　者	研究協力者
＜国語科＞　平成30年11月16日(金)10:55～11:40 第6学年　「物語の世界を読み味わおう(『やまなし』『イーハトーヴの夢』)」	桐　生　直　也	国語教育講座 濱　田　秀　行　先生
＜英語科＞　平成30年11月16日(金)14:00～14:45 第6学年　「Welcome to Japan!」	髙　橋　洋　介	英語教育講座 上　原　景　子　先生
＜理　科＞　平成30年11月19日(月)9:50 ～10:35 第5学年　「リズムモンキーを思い通りに動かそう －振り子の運動－」	井　上　俊　介	理科教育講座 益　田　裕　充　先生
＜家庭科＞　平成30年11月19日(月)10:55～11:40 第5学年　「ゆでておいしく！」	中　里　真　一	家政教育講座 西　薗　大　実　先生
＜体育科＞　平成30年11月30日(金)10:55～11:40 第2学年　「てつぼうランド」	桒　原　和　馬	保健体育講座 鬼　澤　陽　子　先生
＜社会科＞　平成30年11 月30日(金)14:00～14:45 第4学年　「群馬の伝統」	佐　藤　真　樹	社会科教育講座 宮　崎　沙　織　先生
＜生活科＞　平成30年12月3日(月)10:55～11:40 第1学年　「ようこそ たのしい がっこうへ(幼稚園交流)」	芹　澤　嘉　彦	教職リーダー講座 懸　川　武　史　先生
＜算数科＞　平成30年12月3日(月)14:00～14:45 第2学年　「長いものの長さのたんい」	根　岸　　徹	数学教育講座 澤　田　麻衣子　先生
＜道徳科＞　平成31年 1月23日(水)10:55～11:40 第3学年　「きまりは何のため？(「規則の尊重」)」	猿　谷　恵　理	教職リーダー講座 山　崎　雄　介　先生
＜総合的な学習の時間＞　平成31年1月23日(水)14:00～14:45 第5学年　「 広がれ！うんまい焼きまんじゅう」	小　杉　　健	教職リーダー講座 懸　川　武　史　先生
＜図画工作科＞　平成31年2月4日(月)10:55～11:40 第6学年　「光る，輝く，透き通る」	豊　岡　大　画	美術教育講座 郡　司　明　子　先生
＜音楽科＞　平成31年2月4日(月)14:00～14:45 第6学年　「世界の音楽」	稲　森　稚　明	音楽教育講座 三　國　正　樹　先生

※提案授業後16：15～18：00に授業研究会が行われた。

宇都宮大学　久保田善彦先生をお迎えしての「プログラミング的思考育成」研修会

● 報　告

現職教員の成長を促す温かな学び合いの場

教育実習・実践開発部門　　吉　田　浩　之

平成30年度の「現代的学校教育の課題解決シリーズ2018」の「学び合う仲間による教員研修リレー講座」が，次の日程・内容の通り行われました。延べ参加人数は78名でした。今年度も教員一人ひとりの問題意識に支えられた，温かいつながりのある学び合いができました。大学の先生方の理論知を積極的に自分の実践知に取り入れようと真剣に耳を傾けているまなざしの中に，学び続ける教師像の本質を見取ることができました。そのような真摯な姿勢で参加された先生方に，改めてお礼申し上げます。

2018　現代的学校教育課題解決シリーズ日程

学び合う仲間による教員研修リレー講座

講　座　日	担当／所属／専門分野	内　　容
第１回講座 5月12日	13:30～15:00〈常葉大学〉 堀　井　啓　幸　教　授／教育経営	2030年の学校教育をみすえた学校と学びを考える
第２回講座 5月26日	13:30～15:00〈群馬大学〉 岩　瀧　大　樹　准教授／臨床心理学	学校教育相談に活かす認知行動療法のエッセンスⅡ ―改めてソーシャルスキルを多面的に見直す―
第３回講座 6月16日	13:30～15:00〈東京学芸大学〉 佐々木　幸　寿　教　授／教育行政学	学校運営のための学校法務 ―弁護士への対応と活用―
第４回講座 6月30日	13:30～15:00〈金沢学院大学〉 小　林　淳　一　准教授／学校教育学	新学習指導要領にみる教師の新しい役割
第５回講座 7月 7日	13:30～15:00〈群馬大学〉 吉　田　浩　之　准教授／生徒指導	いじめ対応に関する組織的取組の最新動向
第６回講座 7月21日	13:30～15:00〈富山大学〉〉 笹　田　茂　樹　教　授／教育行政学	開かれた学校づくりの現状と課題
第７回講座 10月20日	13:30～15:00〈群馬大学〉 霜　田　浩　信　教　授／障害児心理学	気持ちや行動が荒れやすい発達障害児へのサポート
第８回講座 10月27日	13:30～15:00〈群馬大学〉 黒　羽　正　見　教　授／教師教育	道徳授業実践の方法と課題 ―道徳性の育成に着目して―
第９回講座 11月10日	13:30～15:00〈宇都宮大学〉 久保田　善　彦　教　授／理科教育	これならできるプログラミング教育
第10回講座 11月17日	13:30～15:00〈群馬大学〉 上　原　景　子　教　授／英語教育	英語教育における 小・中・高の接続と「話す力」の育成

ここで，各講座に参加した先生方の感想を紹介させていただきます。

・先生方の講義を聞くたびに，いつも悩んでいる自分に勇気が湧いてくるのを感じます。改めて，暗黙知の大切さを実感でき，意識化を図ることの重要性を認識できました。

・学級経営の難しさと潜在的カリキュラムの関係がストンと腹に落ちました。自分の暗黙知を広げたり深めたりしていくためには，様々なことにチャレンジして自己更新していくつもりです。

・認知行動療法を不登校の事例で問題解決の取り組みをシュミレーションすることは大切であると自分でも思っていたが，今日はそれを確信できました。

・道徳教育との関係がずっと結びつかなかったが，ケアリングの意味でとてもよく分かった。学校教育ではこれから是非必要なことであると思った。とても印象深かった。

・プログラミングの実技，演習など情報教育に関してとても興味を引くもので，自分の研究の考え方にも繋がっていて，奥が深いと感じた。

・今回で3回目の参加でしたが，よい復習の機会でもあり，新たな気づきもあり，とても良い機会となりました。法規の研修はいつ聞いても充実した気持ちになれます。

・現場で日々子どもの授業のみを考えている一教員には，広い視野をもつ良い機会となりました。保護者との会話はできても，対話はできません。対話ができるようになるための方途の一つにコミュニティスクールがあるのですね。

どの講座の感想からも，教師個々人が学び合い自己を冷静に認識・理解するための自己省察の営みが窺えました。今日の厳しい教員社会を乗り越えるには，教員個々人が「今の言説」に惑わされないための柔らかな眼（知）をもつことが必要です。今の学校教育に対する自身の問題意識を大切にして，一緒に学び合い高め合いながら，私たちを取り巻く厳しい教育現実の状況を乗り越えていけたら幸せです。大学に足を運んで，共に学び合って高まり合うことの大切さを再確認する場として，附属学校教育臨床総合センターのリレー講座があります。

報　告

教育臨床事例検討会2018年度の取り組み ～学びの発信に向けて～

教育臨床心理部門　**岩　瀧　大　樹**

8年目の取り組みとなる教育臨床事例検討会は，新たに教育相談員，新任教員の皆様を仲間としてお迎えできました。今年度の大きな特長としては，本事例検討会での学びを，2名の先生が2018年8月3日（金）～ 5日（日）に東京都世田谷区の昭和女子大学にて開催された日本学校教育相談学会第30回総会・研究大会（東京大会）でポスター発表されるとともに，1名の先生が本学教育学部附属学校教育臨床総合センター紀要「教育実践研究　第36号」へ実践事例論文をご投稿されたことがあげられます。本事例検討会での学びが，群馬県を越え，全国の多くの教員，スクールカウンセラーなどの心理職の皆様と切磋琢磨する機会につながりました。今年度の取り組みの概要およびポスター発表・ご論考のご投稿をしてくださった先生方のお声をご紹介いたします。

2018年度の教育臨床事例検討会の活動

回	実施日	時　間	事例提供者	事　例	参加者
1	2018年 5月29日（火）	19:30～21:00	参加メンバーによるグループワーク	新年度にあたっての教育相談を検討する7名	7名
2	2018年 6月26日（火）	19:30～21:00	参加メンバーによるグループワーク	子ども，学校へのアセスメントについて考える	7名
3	2018年 7月24日（火）	13:30～15:00	県内公立学校スクールカウンセラー 県内生徒指導嘱託員	SCによるSGEの実践事例 生徒指導嘱託員としての教育相談援助事例	5名
4	2018年 9月25日（火）	19:30～21:00	県内公立学校スクールカウンセラー	学校教育相談実践事例	10名
5	2018年10月31日（火）	19:30～21:00	県内公立学校スクールカウンセラー	中学校における相談事例	8名
6	2018年11月27日（火）	19:30～21:00	県内公立学校スクールカウンセラー	行動が遅いため集団から孤立する傾向がある児童への援助・指導	6名
7	2019年 1月29日（火）	19:30～21:00	県内公立学校スクールカウンセラー	高校生への登校支援実践事例	7名
8	2019年 2月26日（火）	19:30～21:00	県内公立学校スクールカウンセラー	SCによる教育相談実践事例	9名
9	2019年 3月	19:30～21:00	検討中	検討中	－

2019年2月時点での報告とする。

「日本学校教育相談学会　ポスター発表に参加して」 県内生徒指導嘱託員　角田博美先生

日本学校教育相談学会（東京大会）において，初めてポスター発表を行いました。まずパソコンの購入から始め，PowerPointの操作方法も四苦八苦，原稿は稚拙な文章で発表が危ぶまれましたが，岩瀧先生や皆様からのご指導を頂き，何とか形にすることができました。

実際の発表では，ギャラリーの方々との距離が近く，たくさんの質問を頂き，ポスター発表ならではの醍醐味を味わうことができました。このような機会を与えてくださり，心より感謝しております。

「日本学校教育相談学会　ポスター発表に参加して」 県内スクールカウンセラー　有田高枝先生

2018年8月に昭和女子大学にて行なわれた日本学校教育相談学会（東京大会）でポスター発表をさせていただきました。岩瀧先生から「発表しませんか」というお話をいただき，軽い気持ちで「わかりました」とお返事いたしましたが，それからの苦しみといったら…。

慣れない作業に四苦八苦しながら，岩瀧マジックのおかげで論文も整い，当日を迎えられました。教育臨床事例検討会での，皆さんからの質問が大きな助けとなりました。貴重な経験をありがとうございました。

「実践事例を振り返って」 県内スクールカウンセラー　鈴木里佳先生

岩瀧先生から，実践事例論文作成のお話をいただいた時，私には絶対に無理，書けるはずがないと思っていました。でも先生の懇切丁寧な助言やアドバイスにより，仕上げることが出来ました。

期日を区切り，指定されたページまで取り組んだり，色分けして修正していったり，励ましの言葉をいただきながら，岩瀧先生の認知行動療法を受けているかのように自然なペースで無理なく仕上げることができました。これも一重に岩瀧先生のご指導のお陰です。ありがとうございました。

● 報　告

体験的科目における地域貢献

教育臨床心理部門　**岩　瀧　大　樹**

今年度は，教育臨床心理部門が担当する科目「ネイチャー・カウンセリング」および「コミュニティ・サービス・ラーニング」を受講した教育学部2年生合計156名が，国立赤城青少年交流の家のご支援・ご指導を頂きつつ，地域の子どもたちをサポートする貴重な体験をいたしました。各々の活動の概要は以下の通りになります。

2018年度の活動

取り組み		日　程	人　数	区　分
ボランティア養成セミナー＆救急救命法演習		2018年 6月 2日（土）～ 3日（日）	146名	希望者
赤城フェスタ2018	自然体験等	2018年11月 3日（土）～ 4日（日）	111名	NC
チャンス・フォー・オール チルドレン・キャンプ	竹とんぼ作り	2018年 9月22日（土）	2名	CSL
	ピザ作り	2018年10月 8日（月）	8名	
	焼き芋作り	2018年11月17日（土）	8名	
	パン作り	2018年12月16日（日）	7名	
	写真立て作り	2019年 2月16日（土）	4名	
グローアップ・キャンプ	自然体験や食育 工作体験など	2018年 8月24日（金）～25日（土）	5名	
		2018年10月13日（土）～14日（日）	6名	
		2018年10月20日（土）～21日（日）	17名	

また，赤城フェスタ2018では，好天に恵まれ，多くの地域の幼児，小学生たちと交流を深めることができました。準備や企画の段階から当日に至るまで，温かなエールを頂いた国立赤城青少年交流の家の田村佳之先生からのメッセージをご紹介いたします

「群大生へのメッセージ」　国立赤城青少年交流の家　企画指導専門職　田村　佳之先生

赤城フェスタ2018の前日準備では，子供達の反応を想像し，チームで相談しながら準備を進めました。こちらの想像を超える，創意工夫がされたブースができました。

当日は，子供達が「楽しみながら，何を体験して欲しいか」を念頭に置き，自然の中で積極的に触れ合い，相手の目線に立った活動をしていました。この経験は将来の役に立つと確信しています。

さらに，今年は2012年からの取り組みに，国立赤城青少年交流の家から，感謝状を頂くことができました。本年度の「ネイチャー・カウンセリング」のグループリーダーである，保健体育講座の横山大智さんが代表して賞状を拝受いたしました。今年度の受講者だけではなく，これまでの受講生の皆さんの努力と，国立赤城青少年交流の家のスタッフの皆様からの温かなご指導によるものだと考えております。今後も，地域の子どもたちのために，教職志望の学生として，多くの体験や知見を重ねる貴重な機会にしていきたいと思います。

賞状

群馬大学NC　殿

貴団体は　国立赤城青少年交流の家において　青少年のための施設における規範を示していただきました

そのすばらしい行いに感謝すると共に　貴団体の益々のご発展を祈念いたします

平成三十年十一月四日

国立赤城青少年交流の家
所長　松村　純子

● 報　告

群馬大学教育実践研究36号発行のお知らせ

紀要編集委員長　**豊　泉　周　治**

群馬大学教育実践研究は，今年もＣＤに保存した電子データでの配布となりました。紙媒体のよいところは，机の上に置いておくだけで，冊子の内容が，表紙の執筆者・題目一覧等から見えてくるところです。ただＣＤに保存し配布した場合には，その表紙すら人目に付かないということも生じてきます。そこで，このニュースレターの場をお借りして，36号の題目ならびに代表執筆者の一覧を掲示いたします。これと思った論文がありましたら，配布しましたＣＤまたは大学ＨＰを開いて関心のある論文を読んでいただけたら幸いです。

国語の授業で注意すべき言葉 ―「形（かたち）」、「形（けい）」をめぐって― …… 小林英樹…… 1
中学校国語科・説明的文章の指導内容の研究…… 河内昭浩・今井奈なえ・後閑芳孝・下田俊彦…… 5
ジェンダーに敏感な視点を育てる高校公民科の授業…… 渡邉麻奈美・斎藤　周…… 15
中学校数学で円周率を求める授業実践 ―アルキメデスの方法― …… 伊藤　隆・木村謙太郎…… 31
中学生に向けた集合論 ―授業実践―試案― …… 石井基裕…… 37
思考力・判断力・表現力を育成する授業の構想に関する研究 ―理科授業デザインベース構造化シートを用いて―
…… 斉藤剛志・益田裕充・半田良廣・安藤千尋・鈴木康浩…… 47
理科授業において仮説を文とグラフで表現させる指導が現象を科学的に説明する能力の育成に与える効果
―小学校第５学年「物の溶け方」を事例として―…… 栗原淳一・上木裕太…… 55
データセットを用いた「結果の処理」の活動に焦点を当てた授業実践の分析と課題
中学校理科第２学年「脊椎動物の体温」を事例として…… 佐藤　綾・下平明徳・栗原淳一…… 61
中学校美術部の活動におけるインクルーシブ教育の可能性
―被災地における美術部×地域×アーティストによるアートプロジェクトの実践―…… 梶原千恵・茂木一司…… 73
子どもの生活をより豊かにするアート活動の考察Ⅱ ―地域に向けたBFAプロジェクトはどのように展開しているか―
…… 宮川紗織・郡司明子・石原加奈子・毛塚鮎美…… 81
継続的な運動は一過性運動による白血球数の増加を促進する ―大学生における筋力トレーニングに着目して―
…… 金子伊樹・高橋珠実・新井淑弘…… 91
トランポリン運動が男子大学生の体幹および下肢筋力に与える影響
…… 高橋珠実・石田滉弥・梨本侑季・塩原　茂・新井淑弘…… 101
小学校教諭の器械運動指導に関する意識について ～群馬県Ａ市小学校教諭に対する意識調査から～
…… 清水清志・塩原　茂・金子伊樹・関口明宏・高橋珠実・新井淑弘…… 107
体育授業における教師の笑顔表出と授業評価の関連性の検討：学習者の「楽しさの体験」の評価に着目して
…… 木山慶子・松倉海斗・小川勇之助…… 117
防災の視点を組み込んだ歳時記型郷土トランプの制作とその活用による住教育…… 田中麻里・久保ひと美・安保絵里子…… 125
群馬県の高等学校家庭科教育におけるICT活用に関する実態調査 …… 櫻井理瀬・前田亜紀子…… 135
大学の授業を通した「手話」と「手話通訳」の学習による言語運用能力の向上
―リアクションペーパーにみる会話形式と通訳形式の差異―
…… 能美由希子・金澤貴之・二神麗子・川端伸哉・下島恭子・中野聡子…… 143
外国につながる子どもの教育支援に対する教師の関心と在日外国人と教育に関する教育社会学的研究の知見
…… 新藤　慶・清水喜義…… 153
群馬大学教職大学院の修了生への調査からみられる教職大学院の成果と改善点の検討Ⅳ
―面接調査に基づく児童生徒支援能力・学校運営能力の評価―…… 佐藤浩一・新藤　慶…… 165
心理学概念の学習における具体例生成の効果…… 浅見真友子・佐藤浩一…… 187
「団体・サークル」活動の意義に関する考察 ―女性吹奏楽団員への意識調査をもとに―…… 矢島　正・新藤　慶…… 197
小学校音楽科「金管アンサンブル」の教材化…… 菅生千穂・矢島　正・阿久澤由佳・大島恵依子・富岡千春…… 207
自らの思いや考えを適切に「伝え合う力」を育む小学校国語科指導 ―第３学年における話し合い活動を軸として―
…… 三俣貴裕・山口陽弘・石川克博…… 221
総合的な学習の時間の指導法に関する一検討 ―ピア・サポートモデルによる協働的な学び―
…… 音山若穂・小野澤清楓・懸川武史…… 227
国語科「読むこと」の授業における視覚化の活用…… 田村　充・佐藤浩一・新藤久美香・田島友香・杉本　葵…… 237
校内研修における教員の協働と力量形成のための場づくり ―「教員チーム」による学びを通して―
…… 藤巻直子・髙橋　望…… 249
思考力・判断力・表現力を育む図画工作科指導 ～「つくる，みる，振り返る」の循環システムを取り入れた授業づくりを通して～
…… 福島裕美・大島みずき・懸川武史…… 259
自分の考えをもち、考えを深められる生徒を育てる中学校国語科の学習指導 ～内言の外言化と対話を通して～
…… 片貝ひろみ・大島みずき・懸川武史…… 271
交流及び共同学習の評価について ―図画工作科の実践を基に― …… 中原靖友・豊岡大画…… 279
状況判断における課題解決を通して運動の特性を学習する生徒の育成に関する研究…… 小川勇之助・半田良廣…… 289
不登校傾向の男子中学生への教育相談的介入について ―スクールカウンセラーによる母親への支援を中心に―
…… 鈴木里佳・岩瀧大樹…… 297

● 報　告

センター協議会・資料室利用状況

教育実習・実践開発部門　吉　田　浩　之

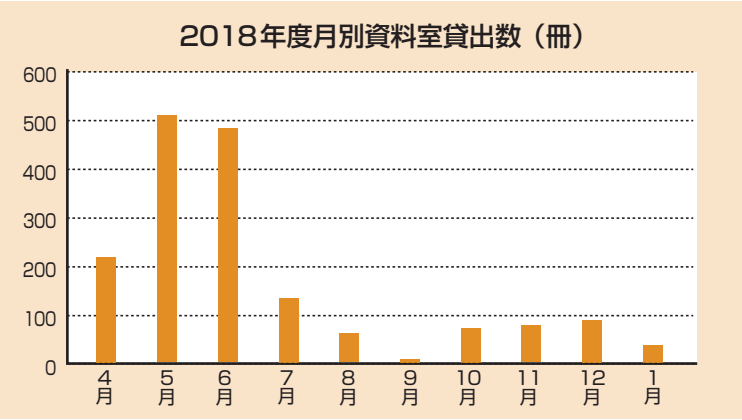
■国立大学教育実践研究関連センター協議会への参加

平成31年２月14日に，東京学芸大学で開催された第94回国立大学教育実践研究関連センター協議会に参加しました。総会では，議事・報告等があり，前回議事録確認後に，各部門担当幹事より2018年度各部門の報告と2019年度計画，収支報告と予算等の審議，各部門プロジェクト報告，規約改正，そして2019年度役員と続きました。その後，東原善訓会長による講演（教育の情報化40年の歩みとセンターの果たした役割と今後の課題）があり，総会は閉会し，その後，部門会議（教育臨床部門，教育実践・教師教育部門，教育工学・情報教育部門）が行われました。

総会議事においては，国立大学法人化，少子化時代の教員養成など組織上の変革の波が押し寄せる一方で，教職大学院の発足，学習指導要領の改訂，大学入試改革，教育職員免許法の改正など，国立大学教育実践研究関連センターの在り方が大きく問われている状況にともない，本協議会の３部門体制（教育臨床部門，教育実践・教師教育部門，教育工学・情報教育部門）について，ワーキンググループを設置し見直しに取り組むことになりました。

また，東原会長による講演では，本協議会の前身となる1972年の国立大学教育工学センター協議会の発足からこれまでの本協議会の歩みを具体的に取り上げつつ，今後の本協議会及び各国立大学教育実践研究関連センターの課題と展望について示されました。

■センター資料室の利用状況



注；2018年１月現在

本センターでは，県内小中学校で使用されている教科書・教師用指導書などを整えています。今年度は小学校における道徳の教科化に伴い，センターでも管内で使用する道徳教科書をすべて用意しました。今年度の貸出数は，月によっては500冊以上の貸出がありました。学習の事前準備を着々と進めていた様子が読み取れます。

■教育実習校別の学習指導案プール状況

本センターでは，学生が教育実習で作成した学習指導案等を実習校毎に保管しています。各市町村教育委員会管内の学習指導案数は，学生が指導案に事前に目を通していくことも重要です。前橋市（67校），高崎市（71校），桐生市（20校），伊勢崎市（21校），太田市（32校），沼田市（18校），館林市（18校），渋川市（19校），藤岡市（10校），富岡市（15校），安中市（14校），みどり市（10校），榛東村（３校），吉岡町（３校），甘楽町（１校），中之条町（１校），玉村町（７校）で，小学校209校，中学校121校，計330校の指導案が保管されています。

● 報　告

次年度へ向けた取組の紹介

教育実習・実践開発部門　**吉　田　浩　之**

■平成31年の「現代的学校教育の課題解決シリーズ2019」の「学び合う仲間による教員研修リレー講座」の事業内容が，下記の通り決まりました。リレー講座の詳細については，各学校へ案内ポスターを配布し，当センターのホームページでも掲載しています。多数の参加をお待ちしております。

2019　現代的学校教育課題解決シリーズ日程

学び合う仲間による教員研修リレー講座

講　座　日	担当／所属／専門分野	内　　容
第１回講座 5月18日	13:30～15:00〈常葉大学〉 堀　井　啓　幸　教　授／教育経営	2030年の学校教育をみすえた学校と学びを考える
第２回講座 5月25日	13:30～15:00〈群馬大学〉 岩　瀧　大　樹　准教授／臨床心理学	学校教育相談に活かす認知行動療法のエッセンスⅢ ーメンタルヘルスの理解とセルフケアの支援に向けてー
第３回講座 6月15日	13:30～15:00〈群馬大学〉 安　藤　哲　也　教　授／生活科・教育実践	子どもの学びをつなぐ幼小接続
第４回講座 6月29日	13:30～15:00〈東京学芸大学〉 佐々木　幸　寿　教　授／教育行政学	学校における教育法規の活用 ー弁護士への対応と活用ー
第５回講座 7月 6日	13:30～15:00〈群馬大学〉 吉　田　浩　之　教　授／生徒指導	いじめ対応に関する組織的取組の最新動向
第６回講座 7月20日	13:30～15:00〈富山大学〉 笹　田　茂　樹　教　授／教育行政学	教員の働き方改革と「チーム学校」
第７回講座 10月19日	13:30～15:00〈玉川大学〉 久保田　善　彦　教　授／理科教育	学びが深まるＩＣＴ ー活用形態から授業改善を検討するー
第８回講座 10月26日	13:30～15:00〈群馬大学〉 霜　田　浩　信　教　授／障害児心理学	発達障害児の理解と支援

■群馬大学教育学研究科長期研修院　　附属学校教育臨床総合センター

附属学校教育臨床総合センターには，現職教員に群馬大学の施設・設備・教員を有効に活用してもらい，実践的指導力を高める「学校ニーズに応じたオーダーメイド」の研修・研究制度があります。平成31年度も４月から以下のように教育研修員・研究協力員制度をスタートさせます。大学の研究知と学校現場の実践知の往還・統合を図りながら，現職教員の資質能力の向上と学校組織の開発をめざしていく協働的支援活動です。

〇長期研修院における教育研修員・研究員の募集

大学の研究知と学校現場の実践知の往還・統合を図りながら，現職教員の資質能力の向上と学校組織の開発をめざした協働的支援活動です。本年度の募集は，教育研修員・研究協力員ともに平成31年度４月１日（月）より随時受け付けます。群馬県内外の先生方による教育研修・教育研究に際して，附属学校教育臨床総合センターが多少なりともお役に立てれば幸いです。

〇学校経営サロンのお誘い

このサロンは，現職学校教員と大学教員が学校経営について，日頃考えていること，感じていること等をざっくばらんに語る場です。日々の教育実践あるいは実践をしていく中で感じる疑問など，大学教員とともに語り合いませんか。若手，中堅教員の参加を歓迎します。この自由な語り合いを通して，参加者一人ひとりが少しでも成長できたらいいですね。

教育研修員・研究協力員の応募方法及び学校経営サロンへの参加の詳細については，当センターのホームページをご覧ください。

群馬大学教育学部　附属学校教育臨床総合センターニュース第７号
発行日：平成31（2019）年３月
発行所：国立大学法人群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター
〒371-8510　前橋市荒牧町四丁目２番地　TEL 027-220-7385　FAX 027-220-7381
URL　http://center.edu.gunma-u.ac.jp